

俳句とあそぶ法

江國滋

俳句とあそぶ法

江國
滋

朝日新聞社

俳句とあそぶ法

0095-255.65-0042

昭和五十九年二月二十日第一刷発行
昭和五十九年四月十五日第四刷発行

著者 江國 滋

発行者 初山有恒

発行所 朝日新聞社

〒104 東京都中央区築地五―三―二

電話 〇三―五四五―〇一三一(代表)

編集・図書編集室 販売・出版販売部
振替 東京〇―一七三〇

印刷所 共同印刷株式会社

定価 一二〇〇円

目 次

11	辞世便覧——挨拶句（三）	117
10	人の悼み方——挨拶句（二）	89
9	つかずはなれず——挨拶句（一）	80
8	前書きの効用	67
7	切れ字は宝	62
6	禁忌は禁忌——季語（三）	52
5	動不動——季語（二）	47
4	よくぞ日本に——季語（一）	41
3	定型のいのち	33
2	自然恐怖症候群	23
1	俳句を、どうぞ	7

俳句とあそぶ法

12	もつけの病氣——病中吟	127
13	寿 い ぎの天敵——慶祝句	139
14	壁に耳あり——旅行吟	155
15	私のノウハウ	169
16	字づらの研究	184
17	ふりがなを考える	195
18	擬声語について	202
19	俳号のつけ方	210
20	芭蕉になつてみる——句風の確立	219
付	句会白書	226
	参考文献	247
	あとがき	249

装丁
安野光雅

1 俳句を、どうぞ

俳句をひねる、という。

あれは「ひねる」ものなのか。子供のころのなぞなぞ遊びに、水道のことをヒネルトジャーデルというのがあったけれど、俳句は水道のようなわけにはいかない。ひねってもひねっても出てこないときは出てこない。ひとつ俳句でもひねってみようか、というぐあいに、だいたい「でも」つきで用いられることが多いようだが、ひねるのだって楽ではない。

俳句をもてあそぶ、ともいう。

遊ぶ、とも、玩ぶ、とも、翫ぶ、とも書く。どちらがうのか。いつも手許に置いて重宝している武部良明氏の名著『漢字の用法』（角川小辞典2）にはこう出ている。

〔弄〕自分のもののように、かつてに動かすこと。例Ⅱ人の感情を弄ぶ。運命に弄ばれる。

〔玩〕好きなものとして、楽しむこと。例Ⅱ笛を玩ぶ。花を玩ぶ。奇を玩ぶ。遊び物のおもちや。

〔翫〕心の慰めとして、愛すること。例Ⅱ美女を翫ぶ。俳句を翫ぶ。

そうか、俳句と美女は「翫ぶ」か。もてあそ翫んで、だが、棄ててはいけない。棄てたら「弄ぶ」もてあそに堕してしまふ。

ふつうは、俳句を作る、という。

俳句を詠む、ともいう。

「いいえ、俳句は詠むものじゃありません、浮かぶものです」

そう言い放つてはばからなかったのは、即興句の名手久保田万太郎だった。現に、こんな前書きの句まで残している。

おのづと口にのぼりたる、
四文字、三文字、五文字なり

春 待 つ や 万 葉、古 今、新 古 今 万 太 郎

うーん、浮かぶもんだ、さすがだな、と思う。思うけれども、句意は？ と問われたら返答に窮する。前書きがなかったら、ほとんど支離滅裂である。口にのぼりたる、といえど聞えがいいけれど、早い話が、口からでまかせということではないのかと思ひながら、万葉、古今、新古今と呪文のようにとなえているうちに、なんとなく「春待つや」という気がしてくるところがこの句の眼目、すなわち、芸である。

浮かぶものです、という万太郎の言葉で反射的に思ひだす句がある。

毎年よ彼岸の入りの寒いのは 子規

正岡子規のよく知られる句だが、この句にも、たしか、母堂の弦きがそっくりそのまま俳句になったのだ、という意味合いの前書がついていたと記憶する。母堂の独り言なら、正真正銘、これこそ「浮かんだ」句である。

句を案ずる、という言い方もある。

対象を前に、ああでもないこうでもないと考えては工夫をこらすのが「案ずる」で、だから完成作品に対して、推敲以前の原型句を「初案」という。

ひねる、もてあそぶ、作る、詠む、浮かぶ、案ずる……。

どれでなくてはいけないということはない。どれがよくないということもない。ひねるだの、もてあそぶだの、そういう態度は不謹慎だというふうにも考えない。ひねるのも、もてあそぶのも、一つの作句態度であると考ええる。だからといって、命をけずるような思いで一句に心血をそそぐ専門俳人の真剣な作句態度をかるんじる気はさらさらない。そこまで打ち込めたら、さぞすばらしいと思う。ただし、それが職業ということになったら、さぞつらからう、とも思う。

素人が、なにもつらい思いまですることはない。もてあそんで楽しければ、それがいちばんである。巧拙は別として、とりあえずだれにでももてあそべるように出来ているのが俳句であり、もてあそべば、興行が深い。それでいてお金はかからない。紙と鉛筆と歳時記さえあれば、生涯楽しめる。高齢化社会の悲惨が目前に迫っているいま、中年から老後にかけての趣味にはもってこいである。という

ことは若者たちには無縁、もしくは不似合いな趣味かというところ、それがそういうものでもないらしい。俳句は古いもので、古いものならアンチークで、アンチークはすなわちナウイのである。趣味？俳句を少々、なーんちゃってカックいー、というような要素が、俳句にはたしかにある。

いま、俳句ブームなんだそうである。

それも、若い人たちや、主婦を中心とする三十代四十代の女性のあいだで、このところ俳句人気が急上昇中で、カルチャーセンターの俳句講座などどこも超満員の盛況だという。同時に、企業内、官庁内の同好会活動もとみに活性化しているとも聞いた。

へブーム爆発！ いまなぜ俳句なのか

へ「枯れて古い」は昔の話

こんな大見出しを掲げて特集記事を組んでいたのは『週刊現代』（五十八年四月三十日号）である。

時代の先取りにかけては目が横に切れているような週刊誌が、貴重な誌面を四ページも割いて、ブームだブームだというのだから、ブームなのだろう。少なくとも、ブームの火種は存在しているとみていい。どれぐらいの火種が存在するのか。

俳句人口百万人。

記事にはそう出ている。編集部のとて推量ではなくて、社団法人俳人協会にお勤めの俳人村沢夏風氏が談話の中で述べておられる数字だから、もちろんしかるべき根拠はあるのだろう。

さはさりながら、である。

“なになに人口”という呼び方のこの種の数字が、私にはどうしても得心がいかない。

ゴルフ人口、麻雀人口、パチンコ人口、競馬人口、カラオケ人口……

これ、みんな不思議である。膨大な不特定多数の集合を、どうやって算出するのと思う。早い話、俳句人口百万人の中に、この私は入っているのかいないのか。

私の場合、どこの結社にも俳誌にも所属していない。俳人協会員でもない。ただ、句会には参加している。気の合った友人たちと語らってスタートさせて以来、月に一度の開筵かいえん、年に二、三回の吟行を欠かさず続けて、もう十五年になる。十五年ぐらいで「もう」とはおこがましい、というのも一つの見方だけれど、石の上にも三年の五倍だ、という考え方もある。

十五年は、長いか短いか。

正岡子規が本格的に作句活動を開始したのは明治二十四年、二十五歳のときからだった。亡くなったのが明治三十五年、三十六歳。正味十一年で、あれだけの業績を残し、あれだけの巨人になった。ただし、子規のはじめての俳句は明治十八年に発表されていて、それが厳密な意味での処女作とされている。最後の作は、死の当日、氣力をふりしぼって認めたしたた有名な糸瓜へちまの句である。

朝霧の中に九段のともし哉　子規（処女作）
痰一斗糸瓜の水も間にあはず　同（絶筆）

この二句のあいだに横たわっている歳月にしても十七年である。私の十五年と、いくらも変らない。正味十一年という実質活動期間と比べたら、むしろ私のほうが長い。子規の一年も私の一年も、同じ

一年である。あつちは天才こつちは凡才という決定的な違いはあるけれど、それはまあ、いうなれば俳句の偏差値みたいなもので、偏差値については、おたがい、深追いするのはやめましょう。

で、偏差値さえ聞わなければ、私の作句歴は子規並みである。当然、俳句人口の一人分を占めるはずだが、国勢調査じゃあるまいし、そういう数え方をするわけがないのだから、あの数字に私が入っているとは考えられない。だったら、俳句人口は百万一人ということになりはしないか。

そんなことを本気で考えているわけでは、もちろんない。謂うところの「なにに人口」というおたばな数字に対するかねてからの疑問を、屁理屈に託して提出してみただけの話である。

あげ足とりはともかくとして、現実には、結社にも句会にも属さないで、もっぱら新聞や雑誌の俳句欄に句を投じること、こつこつ勉強している実作者の数は膨大なものにのぼるだろうし、日本中の老人ホームや「寿大学」といった施設で、俳句を老いの伴侶としている人たちも少なくないだろう。刑務所の独房や雑居房で、前非を悔いながら五七五と指を折っている人びとの存在も忘れるわけにはいかない。

そういう潜在人口、つまり俳句ブームの裾野までを包括して考えていくと、俳句人口は百万人ではきかないのではないか。

「おっしゃるとおりなんです」

ふうほう

白髪瘦身、鶴を思わせる風^{ふう}の村山古郷氏が、某日、おだやかな口調で首肯された。村山さんは、故石田波郷の盟友で、結社『鶴』の同人で、俳誌『嵯峨野』の主宰者で、名著『明治俳壇史』の著者で、同時に俳人協会の理事でもある。

なんだこいつは、協会職員が百万人だといっているのに、職員をとびこして理事に直接質^{ただ}さなきゃ気がすまないのか、というふうに万が一にも村沢夏風氏に受取られては、まことにつらい。村山古郷さんとは、私、縁あつて古いおつきあいなのである。たまたま俳句ブームの特集記事を読んだ直後に、久しぶりにお目にかかる機会があつて、話があつちこつちにはずむうちに、ひとりでに俳句人口の話になった。

「これはねえ、江國さん」

「はあ」

「数えようがないんですよ。わたしらも、いろんな数字を口にするんですが、どれも根拠あつてのことじゃないんでしてね。とらえ方ひとつでずいぶんちがつてきますでしょ。ですからね、俳句人口というところ——」

同じ俳句関係者のあいだで、と笑いながら村山さんがいった。

「百万人から八百万人といわれているんです」

アバウトといたいところだけれど、こうなると、もはや「幻の俳句人口」である。なかをとつて四百万人という平均値を出してみたところで、意味があるとは思えない。

「なんかこう、多少なりとも現実に即して考えられないでしょうか」

「そりゃ、ま、手掛りぐらいいったら」

まず「俳人」の数である。

純粹に俳句を作ることだけで食べていける字義どおりの「俳人」が、このせちがらい世の中に、そ

もそも存在するのだろうかというようなことを考えはじめたら、話はややこしくなる。ここでいう「俳人」は、俳壇に属している人、というほどの意味である。

野球にセトパあり、ボクシングにWBAとWBCあり、俳壇にも二組織あり。

有季定型・旧仮名墨守を創立以来の大原則としているのが俳人協会で、会員数約七千人。どちらかといえば前衛的傾向が色濃いとされているのが現代俳句協会で、会員数約二千人。合わせて九千人の「俳人」が、計算上は存在するわけである。ほとんどがアマチュアであることはいうまでもない。結社を主宰したり、俳誌を経営したりして、俳句だけで生活しているいわゆる専門俳人は、九千人中百人程度だという。

各結社は、主要作者である「同人」と、一般の「会員」でおおむね成り立っているが、同人として籍を置いたまま自分の結社を組織して、そこでまた同人と会員がふえていくというケースも少なくないから、結社人口というののもつかみにくい。

俳誌についてはどうか。『ホトトギス』（明治三十年創刊）、『雲母』（大正六年）、『馬酔木』（昭和三年）、『鶴』（昭和十二年）といった大店格の老舗おきなも、ガリ版刷りの小冊子も、俳誌は俳誌である。『俳句年鑑』や『文芸年鑑』の名簿に掲載されている「一部上場」の俳誌だけでも七百誌に及ぶ。俳人協会発行の『俳句文学館俳誌目録』には千七十八誌が載っている。ただし、これにはすでに廃刊された俳誌も含まれているので、実質的にはざっと千誌というところか。発行部数三万部と称する『ホトトギス』クラスは別格として、千部以上の部数を維持している俳誌は、全体の一割ぐらいだろうといわれている。一誌あたりの平均読者数を五百人として、七百誌で三十五万人、千誌で五十万人という数字が一応は